

## 論 文

## マンチェスター期エンゲルスのマルサス批判

——マルクス主義と人口問題との不幸な関係の始まり——\* 1)

中 澤 信 彦\*\*

## 要 旨

本稿は初期（マンチェスター期）エンゲルスにおけるマルサス人口理論批判の形成過程を明らかにするべく、「ロンドン便り」（1843）、「国民経済学批判大綱」（1844）、『イギリスにおける労働者階級の状態』（1845）の3作品を取りあげて、それぞれにおけるマルサス批判をその文献的源泉に注目しながら検討した。若きエンゲルスがマルサス人口理論への批判を形成していくにあたり、ジョン・ウォッツの『経済学者の事実と虚構』（1842）への依拠がかなり大きかった、とする見解が今日では有力であるが、本稿はむしろ、若きエンゲルスにとって、それと並んで、あるいはそれ以上にロバート・サウジーの『人口論』第2版への書評（1804）から受けた巨大な影響の可能性を指摘した。このサウジーの書評は「貧民の敵」としてのマルサス像の起点に位置づけられる、経済学史・人口学史上きわめて重要な文献であるが、それだけにとどまらず、マルクス主義と人口問題（およびマルサス）との不幸な関係の発生の始源に位置する、マルサス批判の国際的展開（受容と変容）を考える際の最重要文書でもあったと考えられる。

キーワード：エンゲルス、マルサス、サウジー、マルクス主義、人口問題

経済学文献季報分類番号：01-20；03-40

## はじめに

人口分野におけるマルクス（Karl Marx, 1818-1883）の最大の遺産は、資本主義社会にお

\*本稿の下報告を経済学史学会関西部会第180回例会（2021年12月12日）と第72回経済思想研究会（2021年12月26日）で行った（ともにオンライン開催）。有益なコメントを寄せてくださった多くの方々に対して、とりわけ石井穰、太田仁樹、岡田元浩、小沢佳史、北川亘太、小峯敦、竹永進、仲北浦淳基、藤田菜々子、森岡邦泰、山本英司の諸氏に対して、ここに記して厚く感謝の意を表したい。なお、本研究はJSPS科研費18K01536および20K00926の成果の一部である。

\*\*関西大学経済学部 E-MAIL: nakazawa@kansai-u.ac.jp

1) 本稿は「マルサス批判の国際的展開（受容と変容）」という長期的研究課題の一部をなす。

ける産業予備軍（相対的過剰人口）と呼ばれる失業論である。それとマルサス（Thomas Robert Malthus, 1766-1834）の人口理論（絶対的過剰人口）との違いを図式的に示せば次のようになる。マルサスによれば、過剰人口は超歴史的な（＝経済体制と無関係な）自然法則としての人口法則によって生じる。人口増加率は食糧生産増加率よりも高く、そのことに起因する食糧不足が貧困を生む。要するに、「貧困の原因は人口が多すぎることにある」。それに対して、マルクスによれば、過剰人口は資本主義に固有の人口法則によって生じる。資本主義経済体制のもと、資本の有機的構成の高度化（労働生産性の向上、省力化）が進行することにより、可変資本で購入する労働力の一部が過剰となり、失業者に転化する。要するに、「貧困の原因は失業者が多すぎることにある」。だからこそマルクスは、この世から貧困を撲滅するためには、「私的な利潤のための生産（資本主義的生産）」から「万人の必要のための生産（社会主義的生産）」への経済体制移行が不可欠である、という結論に至り、資本主義的生産様式の歴史性とその内的矛盾を覆い隠すマルサスの人口理論を「憎むべき資本主義の擁護の最強の武器」と見なして激烈に批判した。

マルクスの後継者（マルクス主義者）たちは、このマルクスの敵意に満ちたマルサス人口理論批判も受け継いで、そこから「社会主義社会に人口問題は存在しえない」という一般的命題を導き出した。マルクス主義が国家思想となった革命後のソ連や人民中国において、マルサスに好意的な言及をすることがタブー視され、人口問題それ自体が「存在しえないもの」「存在してはならないもの」として排除されてしまった根本的な原因は、まさしくこの点に存する。そして、人口問題をめぐるそのような硬直的な思考態度のために、とりわけ毛沢東時代の中国においては、人口増加が著しく加速化し、それへの差し迫った対応として鄧小平時代に導入された厳格な人口抑制策（いわゆる「一人っ子政策」、1979-2015）が強制中絶・永久不妊手術や無戸籍児（いわゆる黒孩子）といった悲劇を伴ったことは記憶に新しい<sup>2)</sup>。

このようにマルクス主義と人口問題とは不幸にも歴史的に水と油の関係にあったが、マルクスのマルサス批判が活発化するのはロンドン移住（1849）後のことであり、それ以前はむしろエンゲルス（Friedrich Engels, 1820-1895）が先行してマルサスを批判していた。そもそも、こんにち研究者の間で広く知られているように、本格的な経済学研究の開始において、エンゲルスのほうがマルクスに先行しており、マルクスはエンゲルスに刺激されて経済学研究を本格化させた。それゆえ、マルクス主義と人口問題（およびマルサス）との不幸な関係がいかんして発生したのか、その始源を見定めるためには、エンゲルスが1844年8-9

2) 小浜（2020）、吉田（1985, 93-101）、若林（1994; 2005）など。

月にパリでマルクスと再会<sup>3)</sup>して共同作業を開始するまでの初期作品において、マルサスおよび人口問題に対してどのような批判を行ったのかを精査する必要がある。したがって、本稿は初期エンゲルスにおけるマルサス人口理論批判の形成を主題として定める。

1842年10月にベルリンでの兵役を終えたエンゲルスは、同年11月から12月にかけて<sup>4)</sup>父の要請によりイギリスのマンチェスターへと渡った（1844年8月まで約2年間滞在<sup>5)</sup>）。それは父が共同出資した紡績工場で経営者修行をするためであった。渡英前に資本主義への批判と共産主義の理想への共感をすでに示していたエンゲルスであったが（Hunt 2009, ch.2；保住 1996, 40）、マンチェスターで労働者たちの過酷な労働環境と搾取を目の当たりにして強い衝撃を受け、資本主義社会の経済的基礎とその発展とをいっそう深く知るために（国民）経済学——具体的にはイギリス古典派経済学——の研究を開始するとともに、マンチェスター、リヴァプール、ロンドンで労働者の貧困に関する実態調査を進めた。このようにエンゲルスはマルクスに先だって経済学を批判的に摂取し、社会主義思想を形成・深化させていったのであり、その意味においてエンゲルスこそが「最初のマルクス主義者」（Carver 1981, 31 / 訳46）、「マルクス主義の創始者」（田中 1995, 65-66）なのであった。

さて、これから本稿は、初期エンゲルスにおけるマルサス人口理論批判の形成を明らかにするべく、初期作品におけるマルサスへの言及を精査していくわけだが、それらはいずれもマンチェスター期に書かれたあるいは準備されたものである。具体的には、「ロンドン便り（Briefe aus London）（Ⅰ～Ⅳ）」（1843年5-6月公刊）、「国民経済学批判大綱（Umriss zu einer Kritik der Nationalökonomie）」（44年2月公刊、以下「大綱」と略記）、『イギリスにおける労働者階級の状態（Die Lage der arbeitenden Klasse in England）』<sup>6)</sup>（45年5月公刊、

3) 「エンゲルスがはじめて〔当時ケルンで『ライン新聞』の編集長を務めていた〕マルクスを訪問したのは、1842年11月のことで、この時の会見は非常に冷たいものであったといわれる。その理由は、当時、ベルリンの青年ヘーゲル派「自由人」グループと対立を深めつつあったマルクスが、ベルリンから来たエンゲルスをおこのグループの一員とみて警戒したためであった。しかし、1844年8月から9月にかけて、エンゲルスが二度目にマルクスを訪問したとき、ふたりの間で、全面的な理論的見解の一致がみられ、それ以後、ふたりは生涯にわたる協力関係を取り結ぶにいたった」（保住 1995, 39）。

4) 「エンゲルスは1842年11月30日まではロンドンにおり、遅くともマンチェスターに12月15日に到着している」（田中 1995, 86）。

5) エンゲルスは後年（1850年11月～1870年9月）にもマンチェスターで生活を送った——その時期のエンゲルスの生活についてはウィトフィールド（2003）が詳しい——が、本稿では最初の約2年間のほうを「マンチェスター期」と呼ぶことにする。

6) 『状態』の執筆（1844年9月～45年3月）・公刊（45年5月）は2人の再会後であるが、「大綱」の最終段落で『状態』にあたる作品の登場がすでに予告されており、「エンゲルスが、1844年の8月か9月にマルクスと再会し、ふたりの協力関係が始まった時、エンゲルスは自分の著書のための資料を手元に持っていた」（Carver 1983, 45 / 訳60）と伝えられているので、本稿では『状態』を初期（マンチェスター期）の作品に含める。

以下『状態』と略記)の3作品を取りあげて精査していく<sup>7)</sup>。

本稿の構成は以下の通りである。第1節では「ロンドン便り」を、第2節では「大綱」を、第3節では『状態』をとりあげて、それぞれのマルサス批判をその文献的源泉に注目しながら検討する。最後に暫定的結論を記す。

## 第1節 「ロンドン便り」

エンゲルスはマンチェスター到着から約半年後の1943年5-6月に「ロンドン便り」<sup>8)</sup>と題する4編の論文を『スイス共和主義者 (Schweizerischer Republikaner)』紙に寄稿して、当時のイギリスで最もホットなイシューであった穀物法廃止運動、工場法改正問題、アイルランド分離問題などについて現状報告と論評を行っている<sup>9)</sup>。杉原四郎 ([1957] 1985, 16)によれば、「彼が経済学の研究にのり出したのはおそらくこの通信が『スイス共和主義者』に掲載された43年の5月ごろからと推定される」とのことだが、事実、管見のかぎりでは、「ロンドン便り I」こそマルサスの名前をはっきりと認めることのできるエンゲルスの最も古い作品なのである<sup>10)</sup>。エンゲルス曰く、

イギリスは国民経済学の祖国である。しかしこの学問は、教授連や実践的な政治家連のあいだではどうなっているのか？ アダム・スミスの自由貿易は、マルサスの人口理論という間違いじみた帰結にまで追いこまれ (Die Handelsfreiheit Adam Smiths ist in die wahnsinnige Konsequenz der Malthusschen Bevölkerungstheorie hineingetrieben

7) Stedman Jones (1977) は、初期エンゲルスの独自の見解を示す文献として「大綱」と『状態』を挙げるのみであったが、エンゲルスのマルサス批判を扱った Stedman Jones (2020) は、検討対象として先の2作品に「ロンドン便り」を加えている (ただし扱いはかなり小さい)。妥当な判断であるように思われる。

8) 「ロンドン便り I」: 1843年5月16日・『スイス共和主義者』第39号。「ロンドン便り II」: 同5月23日・第41号。「ロンドン便り III」: 同6月9日・第46号。「ロンドン便り IV」: 同6月27日・第51号。

9) エンゲルスのマンチェスター到着から「ロンドン便り」の公刊まで半年ほどの時間が経過しているが、その時期のエンゲルスについて、田中章喜は、「半年近くエンゲルスの執筆活動はほぼ休眠状態となる。というのも、エンゲルス自身、イギリスに行く直前の夏に「近くまた商売の方に時間が一層奪われるでしょう」と書いた通りとなったからであった。…マンチェスター…での仕事はかなりきびしかった。その上、イギリスの商慣習に慣れ、当地の事務作業、手形や書類の作成などに通じるのは簡単ではなかったであろう。…仕事に没頭する毎日を半年ほど続けて、やっと慣れてきたのか、エンゲルスは43年5月に「ロンドンだより」<sup>7)</sup>と題した長文の論文をスイスのある新聞に寄せている」(田中 1995, 68-69)と推測とともに伝えている。

10) 「ロンドン便り」に関する先行研究として、本文中で挙げた杉原 ([1957] 1985, 13-18) 以外に、沖浦 (1976)、田中 (1995) などがある。

worden)、旧独占制度のいっそう開花された、新しい形態のほかにはなにも生みださなかった (*MEW*, Bd. 1, S. 469 / 訳510)。

経済学の研究を本格開始して間もないはずのエンゲルスであるが、この時点ですでに「気違いじみた帰結」といった激烈な言葉をマルサスの人口理論に対して浴びせている。実に自信に満ちた堂々たる批判者ぶりであるが、残念ながら、ここにはエンゲルス自身のマルサス人口理論についての理解が具体的に示されておらず、その批判の内容は判然としない<sup>11)</sup>。また、エンゲルスがそうした批判に必要な知識をいったいどうやって入手したのかについても、引用や出典注などを欠いているため判然としない。だが、手がかりが皆無なわけではない。「ロンドン便りⅢ」においてエンゲルスは次のように述べている。

イギリスの社会主義者はフランスの社会主義者よりはるかに原則的であり、实际的である。…それらの説教家のうち、マンチェスターのウォッツが、いずれにしても傑出した人物であるように私には思われる。この人は多くの才能をもって神の實在と国民経済学とについて数冊のパンフレットを書いている (*MEW*, Bd. 1, S. 474 / 訳515)。

イギリスの高教会<sup>12)</sup>がおごりにふけていたあいだに、社会主義者は、イギリスの労働者階級の教育のために、信じられないほど多くのことをやった。最下層の労働者さえ科学会館で政治上、宗教上、社会上の状態について、はっきりとした意識で論じているのをきくと、はじめのうちはだれでもまったくびっくりせざるをえない。けれどもめずらしい通俗書を見つけだしたり、社会主義者の説教家、たとえばマンチェスターのウォッツの話をきいたりすると、もう誰も驚かない。いまでは労働者は、こぎれいな廉価版で前世期のフランス哲学の翻訳書をもっている。その大部分はルソーの『社会契約論』、〔ドルバックの〕『自然の体系』、ヴォルテールのさまざまな著書で、そのほかに1ペニー本や2ペンス本や雑誌のかたちで、共産主義の原理の解説がある。トマス・ペイ

11) ただし、「アダム・スミスの自由貿易」との並列的な批判という文脈から、マルサスの人口理論を貧民の自業自得（自己責任）論——貧困問題に対する自由放任主義の主張——とほぼ等置させて、それを批判しようとしているのではないか、ということはある程度推測できる。

12) おおまかに言って、英国教会は高教会 (High Church)、低教会 (Low Church)、広教会 (Broad Church) の三派に分かれる。ローマ・カトリック教会との歴史的連続性を強調し儀式を重んじる一派の総称が高教会であり、プロテスタント的傾向を強調し儀式よりも聖書に即した信仰を重んじる一派の総称が低教会である (1830年代にオックスフォード運動が興り両者の対立が激化)。両者の中間に立って、英国教会が高教会でも低教会でなく包括的教会であることを主張する一派の総称が広教会である。以上は大貫他編 (2002) と日本イギリス哲学会編 (2007) を参照してまとめた。

ンや〔パーシー・ビッシュ・〕シェリーの著作の廉価版もまた、労働者の手にわたっている。これに加えて、日曜日ごとに講演もあり、たいへん熱心に聴講されている。こういうわけで私はマンチェスターに滞在中、約3000人を収容する共産主義者の会館が日曜日ごとに満員になるのをみだし、そこで民衆の身にせまって説きおよぶといった、また聖職者にたいする諧謔をもふくむ直接的効果をもつ、演説をきいた (*MEW*, Bd. 1, S. 475-476 / 訳517-518)。

この2つの引用文に登場している「マンチェスターのウォッツ」とは、オーウェン主義者の団体「合理的宗教主義者普遍的共同体協会 (The Universal Community Society of Rational Religionists = UCSRR)」のマンチェスター支部の説教師ジョン・ウォッツ (John Watts, 1818-1887) のことである。マンチェスター期のエンゲルスが最初に共感を覚え、積極的な交流をもったのは、オーウェン主義者、とりわけウォッツであった。彼はウォッツの講演に熱心に出席して、イギリスの社会問題や政治問題についての知識を深めていった<sup>13)</sup>。

初期エンゲルスの思想形成に関しては、かつては彼が「独力でおこなったイギリス古典経済学研究とその帰結としての労働者調査によってもたらされたとするいわばエンゲルス自学説」(田中 1995, 66) が有力であったが、近年ではイギリスの共産主義 (オーウェン主義)、具体的にはウォッツとの接触がもたらした影響——とりわけ彼の著書『経済学者の事実と虚構 (*The Facts and Fictions of Political Economists*)』(1842、以下『事実と虚構』)<sup>14)</sup> からの影響——を重視する見解<sup>15)</sup> が主流となっている<sup>16)</sup>。

では、後者の見解が正しいとすれば、はたして若きエンゲルスはマルサス人口理論に対す

13) やがて彼は UCSRR の機関紙である『新道徳世界 (*The New Moral World*)』に論文を寄稿するようになる。その第21号 (1843年11月18日付) への寄稿では、「われわれの党派の個々の主張についていえば、われわれはほかのどんな党派にたいしてよりもイギリスの社会主義者たちに、ずっと多く同意する。…実践に関連し、社会の現実の諸事実に関連するすべてのことにおいて、われわれは、イギリスの社会主義者たちが、われわれよりずっと先に進んでいてほとんどなにもしのこしたことはないということを知っている。そのうえ、あえていえば、ほとんどすべての問題について私と意見が一致するイギリスの社会主義者たちに、私は会っているのである」(*MEW*, Bd. 1, S. 495-496 / 訳539) と記し、オーウェン主義者たちへの全面的な賛意を表明するほどであった。

14) 『事実と虚構』はウォッツがマンチェスター科学会館 (The Hall of Science) で行っていた講演をまとめたものである。エンゲルスはその講演の熱心な出席者であったことが知られており、それはやがて彼とウォッツとの個人的な交友関係に発展した。

15) Claeys (1984)、Hunt (2009, 89, 96 / 訳122-123, 132-133)、Smethurst, Frow and Frow (1970)、Stedman Jones (2020, 98)、Walter (2020, 24)、古賀 (1976)、田中 (1995; 1996) など。

16) オーウェン主義の影響が過小評価されたのは、晩年のエンゲルスがオーウェン主義を「空想的社会主義」と強く批判したためであろう。

る敵意に満ちた批判をウォッツの『事実と虚構』から摂取したのであろうか？ そうでないとするれば、『事実と虚構』以外の文献的源泉として何が考えられるだろうか？ そもそも若きエンゲルスがマルサスの『人口論』を直接読むことはなかったのだろうか？ これらの問題は次節で、「大綱」の検討後に、詳しく考察することにした。

## 第2節 「国民経済学批判大綱」

「大綱」は1843年末ないし44年1月に執筆され、1844年2月に公刊された。「大綱」を掲載した『独仏年誌 (*Deutsch-Französische Jahrbücher*)』第1・2合併号<sup>17)</sup>は、マルクスとルーゲ (Arnold Ruge, 1802-1880) を共同編集者としてパリにおいてドイツ語で発行されたが、両者の意見の相違のために最初の合冊が出ただけで廃刊となった。マルクスはこの「大綱」に刺激されて経済学の研究を本格開始した——『経済学・哲学草稿』や『経済学批判』などに賞賛の言葉が残されている——こともあって、かなり以前から研究者の間でその重要性が指摘されていた<sup>18)</sup>。

全18節からなる「大綱」は、序論的な3つの節の後、「以下の12節——各節の内容にしたがってかりに標題をつければ、それは、(4) 価値論、(5) 生産費・生産要素論、(6) 土

17) エンゲルスは本誌に「大綱」以外に「イギリスの状態—トマス・カーライル『過去と現在』 (*Die Lage Englands, "Past and present" by Thomas Carlyle*)」を、マルクスは「ヘーゲル法哲学批判序説 (*Zur Kritik der Hegelschen Rechtsphilosophie. Einleitung*)」と「ユダヤ人問題によせて (*Zur Judenfrage*)」を寄稿した。「イギリスの状態—トマス・カーライル『過去と現在』」には一箇所だけマルサス (主義) への言及がある。「金持ちには〔チフスによる〕「17人」の死にたいする同情はない、関心はない。「過剰人口」が17人だけへるということは、社会の幸福ではないだろうか？ もしけちくさい「17人」などではなくて、200-300万人死んだのだったら、なおさらよかったであろうに。——これが、イギリスの富裕なマルサス主義者 (*englischen reichen Malthusianer*) の考え方である」(*MEW*, Bd. 1, S. 533 / 訳581)。ここでエンゲルスは、飢餓や病気による死亡は「過剰人口」の減少という点でマルサス主義の歓迎するところである、との理解を示しているが、これは「大綱」に示されたマルサス理解の圏内にある (再述にすぎない) ので、本稿でこれ以上詳しく検討することはしない。

18) 「エンゲルスの「〔国民〕経済学批判大綱」…は…マルクス経済学がそこから形成されてゆく発端として特別の地位を与えられるべきものである。すなわち、マルクスが経済学の系統的な研究にとりかかるのは、彼が「大綱」を読んだ直後、すなわち1844年の3月頃と推定されるが、その頃つくられた英仏の代表的な経済学書に関する大部なノートの中には、「大綱」の要点の抜粋もふくまれており…マルクスが初期の経済学研究において「大綱」からいかに多くの示唆をうけ、いかにこれを高く評価しているか…。わたくしは、『資本論』体系に結実するマルクス経済学の発端は、この「〔国民〕経済学批判大綱」にあると思う」(杉原 [1957] 1985, 5-6; 強調は杉原)。なお、2017年に公開された映画『マルクス・エンゲルス』(原題: *Le jeune Karl Marx*) では、マルクスとエンゲルスが再会を果たした1844年8-9月のパリにおいて、マルクスがエンゲルスの「大綱」ではなく『状態』(再会時には未公刊)を読んだ結果として経済学の研究を本格開始したかのように描かれており、史実に合わない。

地・地代論、(7) 資本・利潤論、(8) 労働・労賃論、(9) 競争本質論、(10) 競争と独占、(11) 現実社会の競争（とくにその必然的帰結としての恐慌）と理想社会における競争、(12) 人口論批判、(13) 所有集中の法則、(14) 競争の結果としての犯罪、(15) 機械論」（杉原 [1957] 1985, 19）が続く、という構成になっている。

エンゲルスは、最初の節で「マルサスの人口理論」を「かつて存在したもののなかでもっとも粗野で野蛮な体系」かつ「人間愛とか世界市民とかいったあの美辞麗句を打ち倒した絶望の体系」（*MEW*, Bd. 1, S. 500-501 / 訳544）と述べているが、そこではマルサスに関するそれ以上の言及はない。彼のマルサス批判が集中的に表現されるのは、容易に予想されるように第15節「(12) 人口論批判」である。それは「大綱」の中で最も長い節にあたる<sup>19)</sup>。そこでエンゲルスはマルサスの人口理論を次のように厳しく批判している。

マルサスは、次のように主張する。すなわち、人口はたえず生活手段を圧迫する。生産が高められるのと同じ割合で人口は増加する。そして意のままになる生活手段以上に増加しようとする人口特有の傾向が、あらゆる貧困、あらゆる罪悪の原因である。なぜなら、人間が多すぎる場合には、彼らは暴力的に殺されるか、それとも餓死するか、どちらかの方法で除去されねばならないからである。だがこういうことが生じると、ふたたび間隙が生じ、これがただちにまた他の人口増加者によって満たされ、こうしてふたたび旧来の貧困が始まる。…こうした説明の結論はこうである。すなわち、貧民はほかならぬ過剰なものであるから、彼らのためにしてやるべき唯一のことといえば、彼らをできるだけ容易に餓死させること、あるいはそれは何とも仕様がないうこと、そして彼らの階級全体にとってはできるだけ繁殖を少なくすること以外には救いの道はないこと。…慈善は、過剰人口の増加をたすけるから、犯罪であろう。…この下劣で軽蔑すべき学説。…ここにいたって、経済学者の不道徳性はついに絶頂に達せしめられている。…ほかならぬこの理論こそ、自由主義的な自由貿易主義学説のかなめ石であって、これが倒壊するとともに、建物全体も倒壊する。なぜなら、ここで競争が窮乏、貧困、犯罪の原因であることが立証されるならば、だれがそれでもなお競争をあえて弁護しようとするであろうか？（*MEW*, Bd. 1, S. 518 / 訳562-563；傍点強調は中澤）

さらに批判は続く。

19) 「マルサス人口論の批判は「大綱」全体を通じてエンゲルスが最も力を入れた問題である」（杉原 [1957] 1985, 46）。『「大綱」のなかでおそらくはエンゲルスがもっとも力を注いだと思われる——事実もっとも長い節が当てられている——人口＝過剰人口論あるいはマルサス人口論批判』（佐藤 1960, 13）。



われわれは…この〔マルサスの人口〕理論のおかげで土地と人類との生産力に注意をはらうようになったし、この経済学上の絶望を克服してからは、人口過剰にたいする恐怖を永久にもたないようになったのである。…もう一度生産力と人口の関係にたちかえてみよう。マルサスは1つの計算をおこない、それを彼の全学説の基礎にしている。  
 (a) 人口は $1+2+4+8+16+32\cdots$ と幾何級数的に増加するが、土地の生産力は $1+2+3+4+5+6\cdots$ と算術級数的に増加する<sup>20)</sup>。この差異は明らかで、おそるべきものである。だがそれは正しいか？ 土地の生産力が算術級数的に増加するということが証明されているところがあるだろうか？ 土地の広さはかぎられている。そうだとしよう。だがこの地面に使用されるべき労働力は、人口とともに増加する。労働の増加による収穫の増加がかならずしも労働の増加に比例して増加しはしないものと仮定しよう。そうしたとしてもなお第3の要素…すなわち科学がのこっている。そしてこの科学の進歩は人口の増進と同じように無限であり、少なくともそれと同様に急激である<sup>21)</sup> (MEW, Bd. 1, S. 520-521 / 訳564-565；下線は中澤)。

なぜエンゲルスはかくも激烈にマルサスの人口理論を批判するのか？ それは「科学の進歩は人口の増進と同じように無限であり、少なくともそれと同様に急激である」にもかかわらず、マルサスがそのことにまったく目を向けずに、人口増加率と食糧生産増加率との関係を下線 (a) のように人口の幾何級数的増加と土地生産力（生活資料）の算術級数的増加との間の自然的不均衡として科学的な装いのもとに説いたためである。この学説から導かれる政策的帰結は、エンゲルスによれば、この上なく「不道德」的なものである。すなわち、過剰人口に起因する食糧不足こそが貧困の原因であるから、労働者階級の貧困を軽減するためには食糧を増産するか人口を減らす以外に方法がなく、前者が自然的な制約のために困難である以上、後者の選択肢しか残されず、したがって、餓死ですらも人口数を減らすという点で望ましいことになり、他方、慈善や社会改良の試みは、過剰人口の増加を促すから、その善良な意図にもかかわらず犯罪的であり、断固として退けられねばならない、という政策的帰結が得られるからである。

「大綱」の主題は、そのタイトルにも示されているように、国民経済学——エンゲルスはそれを「自由主義的経済学」とも呼んでいるが、イギリス古典派経済学とほぼ同義と考えて

20) 下線 (a) の原文は以下の通り。“Die Bevölkerung vermehre sich in geometrischer Progression:  $1+2+4+8+16+32$  usw., die Produktionskraft des Bodens in arithmetischer:  $1+2+3+4+5+6$ .”

21) このエンゲルスの発言が示唆するような単純な生産力至上主義（プロメテウス主義）の思想を、後年（1868年以降）のマルクスが（エンゲルスと違って）エコロジカルな物質代謝論を軸に自覚的に乗り越えようとしていたことを、斎藤（2019）は指摘する。

よい——の批判にあるが、そこでエンゲルスが最も厳しい批判を浴びせたのは、スミスでもリカードでもなくマルサス（の人口理論）であった。ではなぜエンゲルスはスミスやリカードよりもマルサスに注目した（できた）のか。保住敏彦によれば、

エンゲルスは、マルサスの人口論を、ブルジョワ思想の代表とみなし、それを批判する。丁度同じ頃、執筆されたマルクスの『経済学・哲学草稿』（1844）においては、スミスとリカードとが主に論じられているのに比べて、エンゲルスはよりイデオロギー的なマルサスの理論をブルジョワ経済学の代表とみなし、それを批判している。このことは、マルクスが直接的に社会主義の理想像を述べるよりは、資本主義の機構や運動を明らかにすることに力を注いだのにたいして、エンゲルスが資本主義への人道主義的な批判と社会主義の正しさの証明に力点を置いていたという、違いのあることを示しているように思われる（保住 1995, 42；強調は中澤）。

若きエンゲルスにとって、マルサスの人口理論こそが資本主義（およびそれを擁護する経済学者たち）の非人道性の最も代表的な表現であり、だからこそ最も激烈に批判されねばならなかった。

前節でマンチェスター期のエンゲルスがオーウェン主義者、とりわけウォッツと積極的な交流をもっていたことに触れた。そのことが「大綱」の成立に与えた影響について、ステッドマン・ジョーンズは以下のように論じている。エンゲルスが

オーウェン主義者とりわけウォッツに近い距離にあったがゆえに、彼は「国民経済学批判大綱」を書くことができたのだ。…エンゲルスがウォッツの著作に依拠した度合いは大きかった。実際、その時点で、「大綱」の多くは経済学者たちをエンゲルス自身が読み解いたものではなく、彼らの立場をウォッツが要約したものに基づいていた。エンゲルスの論文〔＝「大綱」〕の5分の1以上がマルサス批判にあてられた。ウォッツと同様に、エンゲルスはアーチボルド・アリソン『人口の諸原理』に依拠して、マルサスの生活資料観を反駁した。…オーウェン主義者たちと同様に、エンゲルスは「大綱」でマルサスの人口理論に厳しく焦点をあてた（Stedman Jones 2020, 98-100）。

ここでステッドマン・ジョーンズは、若きエンゲルスがマルサス人口理論批判を展開するにあたって、ウォッツの『事実と虚構』への依拠がかなり大きかったこと、さらに、若きエンゲルス自身がマルサスら経済学者たちの著作を直接読み解くことがなかった可能性を指摘し

ている。

だが、このステッドマン・ジョーンズの見解には疑問の余地がある。筆者が確認したところでは、『事実と虚構』には、エンゲルスがマルサスの人口理論の基礎と見なす下線 (a) の数値例がまったく登場しないからである。ステッドマン・ジョーンズはエンゲルスが、ウォッツの『事実と虚構』のみならず、トーリー保守派の弁護士・歴史家・社会批評家であるアーチボルド・アリソン (Sir Archibald Alison, 1st Baronet, 1792-1867) の『人口の諸原理とその人間の幸福に対する関係 (*Principles of Population, and Their Connection with Human Happiness*)』(1840、以下『人口の諸原理』) —— 『事実と虚構』と違って「大綱」で明示的に参照されている<sup>22)</sup> —— にも依拠していたことを指摘するが、筆者が確認したところでは、実は『人口の諸原理』にも下線 (a) の数値例は登場しない。

また、ステッドマン・ジョーンズは指摘していないが、「大綱」第15節で明示的に参照されている文献として、匿名著者マーカス (Marcus) の筆によるパンフレット『人口制限の可能性について (*On the Possibility of Limiting Populousness*)』(1838) がある<sup>23)</sup>。筆者が確認したところでは、このパンフレットにも下線 (a) の数値例は登場しない。さらに言うならば、若きエンゲルスがマルサス人口理論批判を展開するにあたって依拠した文献として、ウォッツ『事実と虚構』、アリソン『人口の諸原理』、マーカス『人口制限の可能性について』以外に有力視されてきたのは、プルードン (Pierre Joseph Proudhon, 1809-1865) の

22) 「大綱」において、アリソンの議論は、以下のように記されている。「人類の自由にできる生産力は、無限である。土地の収穫力は、資本、労働および科学の応用によって無限に高めることができる。「人口過剰」のグレート・ブリテンは、きわめて有能な経済学者や統計学者の計算によれば (アリソン著『人口の諸原理』第1巻、第1章および第2章参照)、10年間に、現在の6倍の人口をやしなうにたる穀物を生産するような状態にもっていくことができる。資本は日ごとに増大し、労働力は人口とともに増加し、科学は日ごとますます自然力を人間に従属させる。この無限の生産能力は、意識的かつ万人ために使用されるならば、人類に課せられる労働をたちまち最小限に軽減するであろう」(MEW, Bd. 1, S. 517 / 訳561)。「アリソンは、さきにあげた彼の著作のなかで、土地の生産力に訴え、またすべての成人は自分が使用するよりも多くのものを生産することができるという事実…を、マルサスの原理に対置することによって、マルサスの理論をぐらつかせた」(MEW, Bd. 1, S. 519 / 訳563)。なお、アリソン『人口の諸原理』に関する貴重な先行研究として、柳沢 (2001) がある。

23) 「大綱」において、マーカスの議論は、以下のように記されている。「貧民はほかならぬ過剰なものであるから、彼らのためにしてやるべき唯一のことといえば、彼らをできるだけ容易に餓死させること、あるいはそれは何とも仕様がないうこと、そして彼らの階級全体にとってはできるだけ繁殖を少なくすること以外には救いの道はないこと、あるいは、もしこれがだめなら、「マーカス」が提案したように、貧民の子供を苦痛をあたえずに殺す国家装置を設置するほうがもっとよい——「マーカス」によれば、労働者の各家庭には2人半に子供は生まれてもいいが、それ以上は苦痛をあたえないようにして殺される——ということを彼らに納得させることである」(MEW, Bd. 1, S. 518 / 訳562)。

『財産とはなにか (*Qu'est-ce-que la propriété?*)』(1840)であるが<sup>24)</sup>、筆者が確認したところでは、実は本書にも下線 (a) の数値例は登場しない<sup>25)</sup>。

そうであるとすれば、エンゲルスは下線 (a) の数値例を何によって知ったのか？ マルサスの著作を直接読み解くことによってなのか？ これらの問題は次節で『状態』の検討を終えた後に詳しく考察することにした。

### 第3節 『イギリスにおける労働者階級の状態』

『状態』は1844年9月から45年3月にかけて執筆され、45年5月にライプチヒで公刊されたが、『状態』にあたる作品の登場は「大綱」の最終段落で次のように予告されていた<sup>26)</sup>。

機械のおよぼす影響に注目することによって、私は他のもっとかけはなれた主題である工場制度に達するのであるが、私はここでそれを取扱う気持もその余裕もない。とはいえ、私は、やがて機会をえて、この制度のいとうべき不道徳性をくわしく叙述し、ここできらびやかにあらわれている経済学者の偽善を容赦なく暴露したいと思う (*MEW*, Bd. 1, S. 524 / 訳569; 強調は中澤)。

この予告どおり、『状態』では工場制度の「いとうべき不道徳性」が、家族の解体、都市への人口集中、過剰人口の創出、労働者の生存不安と生存競争といった具体的な問題との関連において詳細に論じられた。

『状態』におけるエンゲルスのマルサス人口理論批判は、「大綱」における批判を基本的に引き継ぎつつも、新救貧法<sup>27)</sup>をマルサス人口理論の政策的応用として捉え、それらを本質

24) 杉原四郎 ([1957] 1985, 26-27) は「『大綱』の基本的見解に大きな見解をあたえたと思われるものの1つにプルードンの『財産とはなにか』(1840年)がある。…彼が『大綱』を書くに際してはプルードンからおそらく多くの示唆を得たであろう」と推測する。

25) プルードン『経済の矛盾の体系、あるいは、貧困の哲学 (*Système des contradictions économiques ou Philosophie de la misère*)』(1846)には下線 (a) の数値例が登場するが(プルードン 2014, 下476-478)、本書は1846年初版であるため、エンゲルスが「大綱」執筆(43年末~44年1月)の際に利用するのは不可能である。

26) Carver (1983, 44 / 訳59)、時永 (1957a, 130)、佐藤 (1960, 26-28)。

27) 新救貧法は3つの基本原則を定める。①貧困を個人の道徳的責任とし、被救済貧民の生活水準は最低層の自立労働者以下の水準でなければならない(劣等処遇の原則)。②院外救済を禁止して、労役場(ワークハウス)以外での救済は認めず、働くことの出来る人には働くことを強制し、それを拒否した場合は厳罰で臨む。③従来の教区中心の救済を見直し、救貧法行政の中央集権化を推し進め、救済法の画一化を図る。いずれも、自立労働者と被救済貧民との境界を明確にし、貧困問題をできるだけ

的に一体のものと見て批判している点に特徴がある。エンゲルスによれば、

プロレタリアートに対するブルジョワジーの最も公然たる宣戦布告は、マルサスの人口論と、それから生まれた新救貧法である。マルサスの理論に関しては、すでにたびたび話してきた。その主要な結論を繰り返しておくならば、地上の人口は常に過剰であり、したがってまた、窮乏や、困窮や、貧困や、不道德が支配せざるをえないこと、過剰で、したがってまた様々な階級にわかれて生存するのが人類の運命であり、永遠の天命であること、そのなかには、多かれ少なかれ富裕で、教養があり、道徳的である階級もあれば、多かれ少なかれ貧乏で、惨めで、無知で、不道德な階級のあること、がそれである。さて、ここから実践に対しては次のような結論——そしてこの結論は、マルサス氏自身が引き出しているものである——が出てくる。すなわち、競争によって他人の賃金を抑制している過剰人口を維持し、またその増加を刺激することにしか役立たないのだから、慈善や救貧基金は意味をなさないこと、消費できる労働生産物は一定量しかなく、失業労働者が就職するごとにこれまで就業していた別の労働者が失業せざるをえないということになり、こうして民間の産業は救貧委員会管轄の産業のおかげで損害を被るので、救貧委員会による貧民の雇用も同様に無意味であること、したがって重要なのは過剰人口を養うことではなく、それを何らかの方法で、できる限り制限すること、がそれである。マルサスはそっけなくも、これまで主張されてきたこの世に存在するすべての人間の生存手段に対する権利を、まったく無意味なもの、と宣言している。(b) 彼はある詩人の次のような言葉を引用している。すなわち、貧民は自然の饗宴に臨んでも、自分たちのための空席がないことに気づく。また彼はさらにこう付け加える。そして自然は貧民に立ち去れと命ずる (she bids him to be gone)。「なぜならば、貧民は生まれる前にまず社会に、自分を受け入れてくれるかどうか尋ねなかったからである」と<sup>28)</sup>。現在この理論は、生粋のイングランドのブルジョワ全員のお気に入りの理論であ

- ㄨ 生活困窮者自身によって解決させることが意図されている。エンゲルスは『状態』において新救貧法を以下のように評している。「1601年（エリザベス治世第43年）の法律にもとづく旧救貧法は、素朴にも、貧民の生計のことを配慮するのは教区の義務であるという原理からまだ出発していた。仕事のない者は救済を受け、そして貧民は正当にも、自分たちを餓死から守るのは教区の義務である、と長い間には考えるようになった。彼らは毎週の救済を恩恵としてではなく、権利として要求したが、このことがとうとうブルジョワジーにとってあまりにも腹立たしいものとなった。1833年に、ブルジョワジーがちょうど選挙法改正法案によって支配権を握り、同時に農村地方の貧窮が頂点に達するとすぐに、彼らは自分たちの見地から救貧法をも改正し始めた」（MEW, Bd. 2, S. 494-495 / 訳520 [岩波下229]）。

28) 下線 (b) の原文は以下の通り。Er zitiert die Worte eines Dichters: Der Arme kommt zum festlichen ↗

るが、それは彼らにとっても最も快適なソファーであるし、しかも既存の状況にとって正しい点を本来たくさん持っているのだから、気に入るのも至極当然である (MEW, Bd. 2, S. 493-494 / 訳519 [岩波下227-228]；下線は中澤)。

下線 (b) に注目していただきたい。エンゲルスによれば、下線 (b) の「貧民は…」以下の箇所はマルサスが「ある詩人」から引用したものとされているが、それはおそらく正しくない。「貧民は…」以下の箇所はマルサス自身が残した言葉、具体的には、『人口論 (*An Essay on the Principle of Population*)』(1798, 1803, 1806, 1807, 1817, 1826) の第2版 (1803) 第4編第6章「貧困の主原因に関する知識が市民的自由におよぼす影響」の第12パラグラフに該当するように思われる。このパラグラフは第2版だけに登場する (第3版以降で削除される)<sup>29)</sup>。

すでに占有された世界 [=所有権の存在する世界] に生まれた人間は、もし彼が正当な要求を有する両親から養ってもらえないならば、またもし社会が彼の労働を欲しないならば、食物の最小部分に対してもこれを権利として要求する資格はなく、また事実上、彼が現にいる場所 [=地球上] にいる資格もない。自然の素晴らしい饗宴において、彼のために空けられた膳立てはどこにもない。自然は彼 [=貧民] に立ち去れと命じ (She tells him to be gone)、彼が賓客たちのある者の同情に訴えることをしないならば、自然はたちまちにして自身の命令を実行するであろう。もしこれらの賓客たちが立って彼のために席を空けるならば、他の乱入者が直ちに現れて同じ恩恵を要求する。来る者にはすべて用意があるという知らせが伝わると、大勢の要求者で広間はいっぱいになる。饗宴の秩序と調和とはかき乱されて、それまで行きわたっていた豊富は欠乏に変えられる。そうして賓客の幸福は、広間のいたるところに見られる窮乏と従属との光景によって、またあてにしてよいと教えられていた食卓が設けられてないことを知って当然にも激怒する者たちの、しつこくせがむ騒ぎによって、打ち壊されてしまうのである。賓客たちはこの饗宴の偉大なる女主人により発せられた、いっさいの乱入者に対する厳しい命令に違反した自分たちの誤りを悟るけれども、もはや手遅れである。彼女はその賓客のすべてが豊かに享受することを願い、自分には無制限な人数の準備はできないこ

↘ Tisch der Natur und findet kein leeres Gedeck für sich - und setzt hinzu - und die Natur befiehlt ihm, sich zu packen (she bids him to be gone) - "denn er hat ja vor seiner Geburt die Gesellschaft nicht erst gefragt, ob sie ihn haben wolle".

29) このパラグラフが第3版から削除された歴史的背景と意義については、Nakazawa (2022) を参照されたい。

とをわきまえていて、食卓がいっぱいになってからは、新しい来客の入場を情け深くも拒絶したのであったが（Malthus [1803-1826] 1989, II, 127；強調はマルサス）<sup>30)</sup>。

それではなぜエンゲルスは、もともとマルサス自身の言葉であったものを、マルサスが「ある詩人」から引用したものと誤記したのか？ そもそもこの「ある詩人」とはいったい誰なのか？

ここで注目すべきなのは、「自然は貧民に立ち去れと命じる」という『人口論』第2版だけに登場する一文にある。当時『人口論』第2版のドイツ語訳は存在せず<sup>31)</sup>、エンゲルスがそれをドイツ語で読むことは不可能である。それでは、『人口論』第2版を英語で直接読んで可能性は考えられないか？ その場合、『人口論』には当時すでにマルサスの生前最終版である第6版（1826）が存在しており、それを参照できたのになぜあえて第2版を参照したのか、という疑問が残されてしまう。これらの疑問を一手に解決する現時点で最も有力だと思える暫定的解答は、以下のようなものである。すなわち、「ある詩人」とはイギリスのロマン派詩人・伝記作家・批評家の1人であるサウジー（Robert Southey, 1774-1843）のこ

30) 原文は以下の通り。A man who is born into a world already possessed, if he cannot get subsistence from his parents on whom he has a just demand, and if the society do [sic] not want his labour, has no claim of *right* to the smallest portion of food, and, in fact, has no business to be where he is. At nature's mighty feast there is no vacant cover for him. She tells him to be gone, and will quickly execute her own orders, if he does not work upon the compassion of some of her guests. If these guests get up and make room for him, other intruders immediately appear demanding the same favour. The report of a provision for all that come, fills the hall with numerous claimants. The order and harmony of the feast is disturbed, the plenty that before reigned is changed into scarcity; and the happiness of the guests is destroyed by the spectacle of misery and dependence in every part of the hall, and by the clamorous importunity of those, who are justly enraged at not finding the provision which they had been taught to expect. The guests learn too late their error, in counteracting those strict orders to all intruders, issued by the great mistress of the feast, who, wishing that all her guests should have plenty, and knowing that she could not provide for unlimited numbers, humanely refused to admit fresh comers when her table was already full.

31) 「経済学の体系的著作をドイツ語圏において初めて公刊したラウ [Karl Heinrich Rau, 1792-1870] も、ヘゲヴィッシュ [Franz Hermann Hegewisch, 1783-1865] の翻訳でマルサス人口論を読んでおり…ラウは、『政治経済学教本』の第2巻『経済政策の根本命題』（初版、1828）において人口問題を取り扱い、マルサスの学説が強力な学問的影響力をもっていたことを確認している」（竹林 2016, 174）。「マルサスの『人口論』はドイツ語訳がすぐに利用できるようになり、それは人口・経済・社会問題に関するドイツ語圏での論議に19世紀全体を通じて強い影響を及ぼした。／フランツ・ヘルマン・ヘゲヴィッシュによる最初にドイツ語訳『人口論』は第3版（1806）からの簡訳版であった。イギリス版第7版を底本とするシュテーベルによる『人口論』新訳は1879年に出版された」（Gehrke 2020, 174-175）。なお、ラウに関する貴重な先行研究として、原田（2020）がある。

とであり、エンゲルスがマルサスの人口理論に関する知見を得るにあたって、サウジーが『アニュアル・レビュー (Annual Review)』誌に寄稿した『人口論』第2版への書評(1804)を大いに利用したのであり、『状態』執筆の際にサウジーがマルサスから引用した文章をその逆であると誤想起した(事実確認を怠った)のだ、と。

この書評について、すでに本稿の筆者は王量亮氏との共同作業により邦訳と解説を公表しているので、ここでは最小限のことを述べるにとどめたい。サウジーはこの書評で、それまでの穏健改革者的なマルサスのイメージ<sup>32)</sup>を意識しながら、それを貧民に冷酷で富者・権力者におもねる偽の改革者というダークなイメージへと刷新して、マルサスの思想の階級的イデオロギーを暴露・論難するために、文学者らしく様々なレトリックを駆使している。下線(a)の数値例を含む『人口論』第2版の一節を、サウジーはこの書評で引用している(Southey [1804] 1994, 117 / 訳144)。エンゲルスが『人口論』第2版を英語で直接読んだ可能性がかなり低い以上、下線(a)の数値例の典拠はこの書評以外に考え難い<sup>33)</sup>。また、サウジーはこの書評で先の『人口論』第2版第4編第6章第12パラグラフを丸ごと正しく<sup>34)</sup>引用している(Southey [1804] 1994, 135-136 / 訳165-166)。後者の引用はきわめて重要で、この引用を通じてサウジーはマルサスが貧乏人に対する同情をやめて彼らが飢えるままにしておくよう富者に提案した人物であること——このパラグラフがマルサス思想の邪悪さの典型的表現であること——を、読者に強く印象づけようとしている。「自然は貧民に立ち去れと命じる」という一文の典拠もこの書評以外に考え難い<sup>35)</sup>。

若きエンゲルスがマルサス人口理論への批判を形成していくにあたり、ウォッツの『事実と虚構』への依拠がかなり大きかった、とするステッドマン・ジョーンズの見解を本稿は決して退けるものではない。むしろ、その見解を概ね受け入れつつも、若きエンゲルスにとって、ウォッツの『事実と虚構』と並んで、あるいはそれ以上にサウジーのマルサス『人口

32) 『アナリティカル・レビュー (The Analytical Review)』第28巻(1798)に掲載された『人口論』初版の書評(執筆者不詳)は、保守反動からほど遠い穏健改革派的なマルサスのイメージがその時点ですでに受容・確立されていた高い可能性を私たちに伝える(中澤・王 2019, 132)。実際、少なくとも『人口論』初版発表当時のマルサスの政治的党派帰属は、フランス革命を支持して対仏講和を主張し議会改革に積極的なフォックス派ウィッグ陣営に近かった(Nakazawa 2012)。

33) ただし、サウジー(およびマルサス)が示した数値例は「1, 2, 4, 8, 16, 32, 64, 128, 256」「1, 2, 3, 4, 5, 6, 7, 8, 9」であり、下線(a)の数値例と比べると、「+」がなくて「32, 64, 128」「7, 8, 9」があるなど、無視できない相違があることも、指摘しておかねばならない。

34) したがって、サウジーが『人口論』から引用する際に“*She tells him to be gone.*”を“*she bids him to be gone.*”に書き換えたわけではない。

35) ただし、下線(b)の「なぜならば、貧民は生まれる前にまず社会に、自分を受け入れてくれるかどうか尋ねなかったからである」に対応する文章は、サウジーの書評の中に見あたらず、それはなぜかという問題が未解決のまま残される。



論』書評から受けた影響が大きかったのではないか、そして、この点においてサウジーによるマルサス批判はマルクス主義によるマルサス批判の直接の先駆として歴史的に評価できるものではないか、と主張したいのである。サウジーのマルサス『人口論』第2版への書評は、中澤・王（2019）が明らかにしたように、「貧民の敵」としてのマルサス像の起点に位置づけられる、経済学史・人口学史上きわめて重要な文献であったわけだが、それだけにとどまらず、マルクス主義と人口問題（およびマルサス）との不幸な関係の発生の始源に位置する、マルサス批判の国際的展開（受容と変容）を考える際の最重要文書でもあったのだ。

## むすび

サウジーが初代プロデューサーとして推し進めた「マルサス＝貧民の敵」化プロジェクトは、その成果を二代目プロデューサーである若きエンゲルスが発展的に継承し、彼からプロジェクト・リーダーを任されたマルクスが、エンゲルスのマルサス人口理論批判を産業予備軍（相対的過剰人口）と呼ばれる失業論へと理論的に彫琢し、資本主義経済体制の存続には産業予備軍の存在が必須の条件であることを明らかにした<sup>36)</sup>。つまり、マルサス批判の国際的展開（受容と変容）への最初の大きな一歩は、サウジーからエンゲルスへのバトンタッチによって踏み出されたのである。

マルサスの人口理論に対する若きエンゲルスの批判は、従来、「社会主義的人口論の基礎をうち立てたもの」（杉原 [1957] 1985, 22; 佐藤 1960, 20）として、高い評価を獲得してきた。しかし、ソ連・東欧の社会主義の崩壊を知り、マルクス主義の真理性を自明視できない時代に生きる私たちは、この若きエンゲルスの知的営為をどのように評価すべきであろうか？ 言うまでもなく、過去の様々な知的営為を現在の知見の高みから後知恵的に賞賛したり断罪したりすることは、単なる特権の行使にすぎず、真に歴史的な理解からほど遠い。可能なかぎり同時代の目線で歴史的事実は把捉され理解されるべきである。当時エンゲルスがまだ20代前半の若者にすぎなかったこと、マルサスとエンゲルスとの間に横たわる約50年という時間のずれ（経済史的状況や科学技術の発展度合いの違いなど）なども考慮して評価しなければならないことは、筆者自身も重々承知している。そうであってもなお、思想史（特にマルサスの）研究者である筆者としては、若きエンゲルスは後世に対する重大な知的な過ちを（本人の意図しない形であっても）犯してしまったのだ、と厳しめの評価を下さざるをえない。

36) エンゲルスとマルクスにおける産業予備軍（相対的過剰人口）の思想の発展については、Meek (1953)、時永 (1957a; 1957b)、佐藤 (1959)、吉田 (1956) などを参照されたい。

サウジーによって生み出され、エンゲルス（後にマルクス）によって継承・発展させられた「貧民の敵」としてのマルサス像は、ソ連・東欧の社会主義の崩壊とその後のマルサス研究の進展<sup>37)</sup>によっても、完全に払拭されていないように思われる。例えば、佐和隆光によって描かれ続けてきた過度に単純化されたマルサス像は、彼の経済評論家としての名声にも強く後押しされて、一般世間での広い認知を獲得してきたように推察される。佐和によれば、

慈善的な救貧策が無意味どころか有害だとするマルサスの所説は、現代の保守主義者の言説と酷似している。将来起こりうる貧困と悪徳を回避するには「貧乏人から先に死んでもらうしかない」とマルサスは言ったのだが、現代の保守主義者は「高福祉高負担は、人々の勤労意欲を損ない、社会の活力を低下させるから良くない」と言う。／マルサスと現代の保守主義者に共通するのは、社会を改良しようとする政府の施策のことごとくが、意図に反する逆効果を生むとの確信である。／…マルサスの人口論そのものは、その後の技術進歩により裏切られたが、社会改良主義のはらむ自己矛盾を指摘したマルサスは、いまだに健在である。と言うよりはむしろ…先進資本主義諸国における支配的イデオロギーの先駆者としてよみがえってみせた（佐和 1997）。

だが、マルサスの『人口論』のいったいどこに「貧乏人から先に死んでもらうしかない」などと書かれてあるのか。もちろん、どこにも書かれていない。私たちは、佐和の描くこうした歪んだマルサス像の中に、サウジーによって生み出され、エンゲルス（後にマルクス）によって継承・発展させられた「貧民の敵」としてのマルサス像の亡霊の強靱な生命力を確認することができるはずである。

若きエンゲルスは二次文献のみにもとづいてマルサスの人口理論を「憎むべき資本主義の擁護の最強の武器」と断罪するにいたった。一次文献にもとづかず先入観にとらわれたマルサス批判が、マルクス主義陣営において正統的見解となるきっかけをエンゲルスは作った。「マルサス憎し」「マルサスは資本主義の手先」である以上、産児制限がマルサス人口理論にもとづく資本主義的政策として、その後の社会主義国においては原則として認められない政策となった。若きエンゲルスの粗野なマルサス読解とそれを鵜呑みにした彼の後継者・信奉者たち<sup>38)</sup>が、煎じ詰めれば、中国における人口爆発とそれへの差し迫った対応として導入

37) 近年のマルサス研究は「労働者階級の境遇の漸進的改善を希求し続けた穏健な改革者」としてのマルサス像が強調し、「フランス革命に批判的で、没落しつつある地主階級の擁護者として、彼らの不生産的消費の必要性を説く、保守的な」古いマルサス像に対する根本的な改訂を迫っている。こうした近年の研究傾向については、さしあたり、柳田（2005）、中澤（2009; 2015）などを参照されたい。

38) 粗野で硬直的なマルサス人口理論理解はレーニンによってさらに増強されるが、それについては

された反人権的な一人っ子政策の悲劇を生み出した主犯者であった、と結論的に評価するのは果たして現在の知見の高みからの後知恵的な断罪に過ぎないのであろうか？<sup>39)</sup>

### 参考文献一覧

- MEW*: Karl Marx and Friedrich Engels, *Werke*, Berlin: Dietz Verlag, 1956-1990. 『マルクス＝エンゲルス全集』大内兵衛・細川嘉六監訳, 大月書店, 1959-1991. 引用は、巻数 (Bd.)、原文ページ (S.) / 邦訳ページと表記する。『イギリスにおける労働者階級の状態』については、一條和生・杉山忠平訳 (全2巻, 岩波文庫, 1990) のページ数も併記する。訳文は既存の邦訳どおりでない部分もある。*MEW*からの引用にかぎらず、本稿におけるすべての引用文において、[ ] は引用者による補足である。
- Alison, Archibald. 1840. *Principles of Population, and Their Connection with Human Happiness*, 2 vols. Edinburgh: William Blackwood and Sons.
- Carver, Terrell. 1981. *Engels — Past Masters*. Oxford: Oxford University Press. 『エンゲルス』内田弘・杉原四郎訳, 雄松堂出版, 1989.
- Carver, Terrell. 1983. *Marx & Engels: The Intellectual Relationship*. Sussex: Harvester Press. 『マルクスとエンゲルスの知的関係』内田弘訳, 世界書院, 1995.
- Claeys, Gregory. 1984. Engels' *Outlines of a Critique of Political Economy* (1843) and the Origins of the Marxist Critique of Capitalism. *History of Political Economy* 16(2): 207-232.
- Faccarello, Gilbert, Masashi Izumo and Hiromi Morishita eds. 2020. *Malthus across Nations: The Reception of Thomas Robert Malthus in Europe, America and Japan*. Cheltenham, UK and Northampton, MA, USA: Edward Elgar.
- Gehrke, Christian. 2020. The Reception of Malthus in Germany and Austria in the 19th Century. In *Malthus across Nations*, edited by Faccarello, Izumo and Morishita: 174-235.
- Hunt, Tristram. 2009. *Marx's General: The Revolutionary Life of Friedrich Engels*. New York: Henry Holt and Co. 『エンゲルス—マルクスに将軍と呼ばれた男』東郷えりか訳, 筑摩書房, 2016.
- Malthus, Thomas Robert. [1803-1826] 1989. *An Essay on the Principle of Population*, Variorum edition, edited by P. James, 2 vols. Cambridge: Cambridge University Press.
- Marcus. 1838. *On the Possibility of Limiting Populousness*. London: John Hill.
- Meek, Ronald L. ed. 1953. *Marx and Engels on Malthus: Selections from the Writings of Marx and Engels Dealing with the Theories of Thomas Robert Malthus*. London: Lawrence and Wishart. 『マルクス＝エンゲルス マルサス批判』大島清・時永淑訳, 法政大学出版局, 1959.
- Nakazawa, Nobuhiko. 2012. Malthus's Political Views in 1798: A 'Foxite' Whig? *History of Economics Review* 56: 14-28.
- Nakazawa, Nobuhiko. 2022. Reviewing the Development of Malthus's Ideas on Educational and Parliamentary Reforms from 1803 to 1806. *Cahiers d'Economie Politique* 82. (forthcoming)
- Smethurst, John, Edmund and Ruth Frow. 1970. 150th Anniversary of Engels' Birth: Frederick Engels and the English Working Class Movement in Manchester, 1842-1844. *Marxism Today* 14(11): 340-346. 古

↘ 本稿では触れず、別稿で論じたい。また、本稿では、若きエンゲルスがサウジーの書評をどうやって知ったのか、という問題も依然として未解決のまま残される。それについても他日を期したい。

39) この意味で、テキストを読むという行為は、きわめて実践的で政治的な営みでもあるのだ。

- 賀秀男訳「マンチェスターにおけるフレデリック・エンゲルスとイギリス労働階級運動 1842-1844—エンゲルス生誕150年記念」『季刊 社会思想』1971, 1(4): 169-184.
- Southey, Robert. [1804] 1994. Review of Malthus's *Essay on the Principle of Population*. In *Population: Contemporary Responses to Thomas Robert Malthus*, edited by Andrew Pale. Bristol: Thoemmes Press: 116-137. 「書評「マルサス『人口論』」中澤信彦・王量亮訳, 『マルサス学会年報』2019, 28: 143-171.
- Stedman Jones, Gareth. 1977. Engels and the Genesis of Marxism. *New Left Review* 106: 79-104.
- Stedman Jones, Gareth. 2020. Malthus, Nineteenth-Century Socialism, and Marx. *The Historical Journal* 63(1): 91-106.
- Walter, Ryan. 2020. Malthus's Principle of Population in Britain: Restatement and Antiquation. In *Malthus across Nations*, edited by Faccarello, Izumo and Morishita: 18-52.
- Watts, John. 1842. *The Facts and Fictions of Political Economists: Being a Review of the Principles of Science, Separating the True from the False*. Manchester: A. Heywood.
- ウィトフィールド, ロイ. 2003. 『マンチェスター時代のエンゲルス—その知られざる生活と友人たち』坂脇昭吉・岡田光正訳, ミネルヴァ書房.
- 大貫隆他編. 2002. 『岩波 キリスト教辞典』岩波書店.
- 沖浦和光. 1976. 「『イギリスの状態』(I・II・III) その3—マンチェスター時代のエンゲルス」『現代の理論』13(1): 85-104.
- 古賀秀男. 1976. 「チャーティストとマルクス・エンゲルス」『思想』620: 43-63.
- 小浜正子. 2020. 『一人っ子政策と中国社会』京都大学学術出版会.
- 斎藤幸平. 2019. 『大洪水の前に—マルクスと惑星の物質代謝』堀之内出版.
- 佐藤金三郎. 1959. 「産業予備軍の形成」『経済学雑誌 (大阪市立大学)』41(1): 1-39.
- 佐藤金三郎. 1960. 「競争と過剰人口—エンゲルス『国民経済学批判大綱』を中心に」『経済学雑誌 (大阪市立大学)』42(6): 1-33.
- 佐和隆光. 1997. 「マルサス主義「環境」に影—援助を有害視、率先改革嫌う」『日本経済新聞』1997/04/21朝刊: 42.
- 杉原四郎. [1957] 1985. 『ミルとマルクス 増訂版』ミネルヴァ書房.
- 竹林史郎. 2016. 「『人口論』受容史: ドイツ」『マルサス人口論事典』マルサス学会編, 昭和堂: 174-177.
- 田中章喜. 1995. 「エンゲルスとイギリス社会主義—マンチェスターの若きエンゲルスとオーウェン主義者」『政経論叢 (國士館大學)』92: 65-91.
- 田中章喜. 1996. 「マンチェスターのプロレタリア、オーウェン主義者とエンゲルス」『政経論叢 (國士館大學)』98: 1-26.
- 時永淑. 1957a. 「マルクスにおける「相対的過剰人口」論の成立にかんする一考察」『経済志林 (法政大学)』25(1): 103-135.
- 時永淑. 1957b. 「マルクスにおける「相対的過剰人口」論の成立について (続)」『経済志林 (法政大学)』25(3): 59-94.
- 中澤信彦. 2009. 『イギリス保守主義の政治経済学—バークとマルサス』ミネルヴァ書房.
- 中澤信彦. 2015. 「T・R・マルサス—農工バランス重視の経済発展論の今日的意義」『保守的自由主義の可能性—知性史からのアプローチ』佐藤光・中澤信彦編, ナカニシヤ出版: 87-117.
- 中澤信彦・王量亮. 2019. 「サウジーのマルサス批判—「貧民の敵」マルサス像の起点を探る」『マルサス学会年報』28: 127-141.
- 日本イギリス哲学会編. 2007. 『イギリス哲学・思想事典』研究社.

- 原田哲史. 2020. 『19世紀前半のドイツ経済思想—ドイツ古典派、ロマン主義、フリードリヒ・リスト』 ミネルヴァ書房.
- ブルードン, ピエール=ジョゼフ. 1971. 「所有とは何か」長谷川進訳, 『ブルードンⅢ (アナキズム叢書)』 三一書房, 所収.
- ブルードン, ピエール=ジョゼフ. 2014. 『貧困の哲学』 齊藤悦則訳, 全2巻, 平凡社ライブラリー.
- 保住敏彦. 1995. 「エンゲルスの理論活動の意義と問題—没後100年を記念して」『経済学史学会年報』 33: 39-51.
- 柳沢哲哉. 2001. 「トリー保守派のマルサス像—アーチボルド・アリソン『人口原理』の考察」『香川大学経済論叢』 74(2): 211-224.
- 柳田芳伸. 2005. 『増補版 マルサス勤労階級論の展開—近代イングランドの社会・経済の分析を通して』 昭和堂.
- 吉田忠雄. 1956. 「マルクスとエンゲルスの人口論について」『政経論集 (明治大学)』 24(6): 128-158.
- 吉田忠雄. 1985. 「社会主義国におけるマルサス」『政経論集 (明治大学)』 53(4-5-6): 75-101.
- 若林敬子. 1994. 『中国 人口超大国のゆくえ』 岩波新書.
- 若林敬子. 2005. 『中国の人口問題と社会的現実』 ミネルヴァ書房.

